

ロビンソン編 Austin Robinson

『Appropriate Technologies for Third World Development — Proceedings of a Conference held by the International Economic Association at Teheran, Iran—』1979 刊

本書は、各国の主要な経済学会により構成される国際経済学会連合会（IEA, International Economic Association）が、第三世界の適正技術をテーマに1979年にイランのテヘランで開催した国際会議での計15の報告および討論、そして会議の総括などを編纂したものである。適正技術について世界的に議論が活発になっていた1970年代後半において、欧米および日本、トルコ、イラン、インドなど各国の経済学者のほか、UNDP（国連開発計画）、ILO（国際労働機関）、世界銀行、USAID（アメリカ国際開発局）、イギリス海外開発省など開発途上国の開発援助政策に関わる国際機関および各国の援助機関、多国籍企業などからも参加している。主に工業部門の効率的な資本投下や労働生産性など経済的側面についての検討が中心ではあるが、世界的にメジャーな機関が一同に会した場で、適正技術に関して当時どのような議論があったのかを知ることができる。

会議の背景には、先進国からの資本集約的で労働生産性の高い技術の移転が、途上国においては一部の限られた人々のみに恩恵をもたらさず、広範な雇用を生み出さず、地方の農林水産業地域や小都市が置き去りにされているという問題があることが、参加者の共通認識となっていた。その上で会議では、なぜ開発途上国で適正技術が使われないのか、その理由を多面的に掘り下げ、効果的な対応策を検討している。

その中で、編者の英国の経済学者ロビンソンは、途上国ではオルターナティブな労働集約的技術であっても、生産品一単位当たりの資本が先進国よりも少ない効率的な技術が必要であり、工学的にプロフェッショナルなエンジニアが威信をかけた技術が求められているとする。これに関連して会議では、USAIDが当時すでに試みているように、様々な分野における技術的なノウハウや成功と失敗の情報を収集して伝える国際的なメカニズムを構築するとともに、第三世界における研究開発を充実すべきであるといった提案が出された。

一方、会議の総括では、適正技術の定義の問題において、「適正さ」をめぐる概念が二面性を帯び、その「違い」をめぐる種々の緊張が生まれていたことが記されている。すなわち、経済学者が志向する「雇用を生み出すことで、再配分の効果により発展に貢献する」「大多数の人々の基本的なニーズを満たす生産品をつくる」という見地での「適正さ」と、環境を重視したより「広い」解釈により「技術が地元の社会経済構造や自然生態系に即した生活のいずれにも調和し、効果が社会の最も貧しい人々の福祉向上をもたらす」という捉え方での「適正さ」、これら二つがあったとされる。

この後者の解釈をとるインド科学院のアムルヤ・クマル・レディは、適正技術の発展的な活用のために優先すべきこと(preference)として、環境、経済、社会の3つの枠組において、それぞれ約10項目を挙げている。これに対しロビンソンは、適切な装置の案出、試験、改良、製造、最終的な適用に導くまでに、第三世界の研究開発がどこまで効果的であるか

について、まだ十分にカバーされていないと、実践面での課題を示している。

この会議以降、ここで挙げられた争点や提案がどのように展開したのか、さらに実際の関係機関の施策はどう変化したのか、本書は、1980年代に続く適正技術をめぐる世界的な動きを注視するための着眼点を与えてくれている。

(笹本浩子／神野芳紀)

[書誌データ]

Robinson, Austin (ed.), *Appropriate Technologies for Third World Development: Proceedings of a Conference held by the International Economic Association at Teheran, Iran*, The MacMillan Press, 1979

[目次]

Acknowledgements

List of Participants

Introduction (by Austin Robinson)

1. Adaptation of Technologies to Available Resources (by Paul Bourrieres)
Discussion
2. On Appropriate Technology (by Partha Dasgupta)
Discussion
3. The Availability of Appropriate Technologies (by Austin Robinson)
Discussion
4. Intermediate Technology in China's Rural Industries (by Carl Riskin)
5. Appropriate Technologies: Some Aspects of Japanese Experience (by Shigeru Ishikawa)
Discussion
6. Appropriate Technology in the Dual Economy: Reflections on Philippine and Taiwanese Experience (by Gustav Ranis)
Discussion
7. Some Practical Constraints on the Use of Appropriate Technologies in Turkish Industrial Development (by Gunal Kansu)
8. Problems in the Generation of Appropriate Technologies (by Amulya Kumar Reddy)
9. Technology and Industrialisation: Reflections on the Iranian Experience (by Farhad Rad-Serecht)
Discussion
10. Some Reflections on the Choice of Appropriate Industrial Technology for Developing Countries (by Rene Mercier)

11. Transfer and Adaptation of Technology: Unilever as a Case Study (by K. H. Veldhuis)
12. The Choice of Appropriate Technology by a Multinational Corporation: A Case Study of Messrs Philips, Eindhoven (by J.C. Ramaer)

Discussion

13. Choice of Technologies: The Influence of Multilateral Financial Agencies (by Harold B. Dunkerley)
14. The Role of Aid Donors in the Choice of Appropriate Technology (by J.M. Healey and J.T. Winpenny)
15. Proposal; for a Programme on Appropriate Technology prepared by the United States Agency for International Development (by Peter Thormann)

Appendices to Chapter 15

1. Proposal for a Programme in Appropriate Technology
2. Appropriate Factor Proportions for Manufacturing in Less Developed Countries: A Survey of the Evidence (by Lawrence J. White)
3. Policies to Encourage the Use of Intermediate Technology (by Howard Pack)
4. Appropriate Institutions for Appropriate Technology (by Bruce Koppel and Gary Hansen)

Discussion

16. A Summing Up of the Conference (by Charles Cooper)

Index